読書通信

第12號
発行人：amagata

コロナウイルス蔓延、管理国家への危惧

新型コロナウイルスによって世界中の人々が生存の危機に晒されている。また、経済的にも同様であり、他にも差別の問題、教育の問題など多方面にその影響は渡っている。いったい、いつになったら終息するのであろうか。また、新型コロナウイルスの危機が終息した後、社会はどのように変化するのであろうか。いや、変化しなければならないのであろうか。

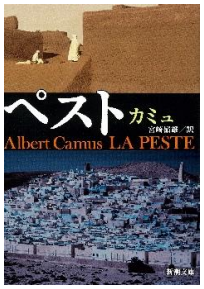
新型インフルエンザ、SARSなど10年毎に人類は危機に遭遇している。歴史的に見れば、ペスト、梅毒、スペイン風邪など、枚挙にいとまはない。伝染病を扱った文学作品には、アルベール・カミュ「ペスト」、小松左京「復活の日」等がある。

外国では「ロックダウン（都市封鎖）」を発令し、市民の行動を厳しく制限している国もある。罰則を伴うところもある。また、この機に乗じて、中国政府は民主主義を貫こうとする香港に対して、締めつけを強化している。緊急事態を口実に、国家が国民を厳しく管理する管理国家・全体主義国家への道を危惧する。全体主義国家を描いた作品には、ジョージ・オーウェル「1984」「動物農場」、マーガレット・アトウッド「侍女の物語」等がある。

＊＊　＊＊　＊＊

❒ 作品解説 ❒

▽アルベール・カミュ「ペスト」



アルジェリアのオラン市で、ある朝、医師のリウーは鼠の死体をいくつか発見する。ついで原因不明の熱病者が続出、ペストの発生である。外部と遮断された孤立状態のなかで、必死に「悪」と闘う市民たちの姿を年代記風に淡々と描くことで、人間性を蝕む「不条理」と直面した時に示される人間の諸相や、過ぎ去ったばかりの対ナチス闘争での体験を寓意的に描き込み圧倒的共感を呼んだ長編。

▽ジョージ・オーウェル「1984」

1950年代に発生した核戦争を経て、1984年現在、世界はオセアニア、ユーラシア、イースタシアの3つの超大国に分割統治されている。作品の舞台となるオセアニアでは、「ビッグ・ブラザー」によって支配され、思想、言語、結婚などあらゆる市民生活に統制が加えられ、物資は欠乏し、市民は常に、ほぼすべての行動が当局によって監視されている。

ウィンストン・スミスは真理省の役人として歴史記録の改ざん作業を行なっている。しかし、彼は以前から現体制に疑問を抱きながら仕事をしてきた。ある日、党の規則に反したことから「思想警察」に逮捕され、「愛情省」で尋問と拷問を受けることになる。そこで自分の思想・信念を徹底的に打ち砕かれ、党の思想を受け入れ、処刑（銃殺）される日を思いながら"心から"党を愛するようになる。

現在コロナ禍で旅行に行けません。そろそろ旅行にいきたいなあ、と思いながら、早期の終息を願って、旅行の本でも読みましょう。

蔵前仁一「ゴーゴー・インド」（凱風社）

インド旅行記のバイブル。著者蔵前仁一が描いたイラストや写真を交えて、インド旅行の様々な模様が綴られている。10日間のインド旅行後、「インド病」に掛かった著者は再びインドを訪れ、インドにはまってしまう。清濁併せ呑むインド。混沌たるインド。そこには世界の縮図が存在する。必ずインドに行きたくなってしまう危険な本。

現在は「新ゴーゴー・インド」（旅行人）リニューアル版が発売されている。

＊インド病…日本にいるのに、何事もインドと比較し、現状に違和感を覚え、インドのことが頭から離れない病気。「インドではねえ……」が口癖になる。

✐✐✐後記✐✐✐

11年前、村上春樹「1Q84」読了を契機に、ジョージ・オーウェル「1984」を読んだ。後半の拷問シーンを読んだのが、ベトナムのダナン空港だった。そこが薄暗く、無機質な空間だったので、恐怖感が増幅され、本当に怖かった。管理国家はあり得ないと思った。現在町中に監視カメラが設置されているが、……如何なものか。

＊＊　＊＊　＊＊

23年前、1ヶ月程インドを旅行した。タージ・マハルは他とは違い、写真の如く実に美しかった。道端で飲む、素焼きのカップに入ったチャイがおいしかった。唇に触れる素焼きの感触がいい。一番の思い出は、降り注ぐ朝日の中、インド人に混じって、聖なるガンジス川で沐浴したこと。遺灰が流され、動物の遺体が流れ、一方で、洗濯をしているガンジス川。その日の夜から、残り3週間、下痢に襲われる羽目にはなったが……。ガンジス川は、ヒマラヤ山脈からベンガル湾に、北から南に流れている。けれども、バラナシ付近だけは、南から北に流れている。僕も例に漏れず、帰国後は「インドではねえ……」が口癖になってしまった。

「読書通信」バックナンバー